The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語身体部位詞の比喩義に関する認知言語学的研究 ー精神作用の座としての腹・胸・頭の理解の共時的・通時的分析ー
Author(s)	後藤, 秀貴
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（後　藤　秀　貴）	
論文題名	日本語身体部位詞の比喩義に関する認知言語学的研究 —精神作用の座としての腹・胸・頭の理解の共時的・通時的分析—

論文内容の要旨

本研究は，〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する語を構成要素に含み，精神作用に関する意味（精神義）を持つ下記(1)–(3)のような日本語表現を認知言語学の枠組みに基づいて分析することで，それらの表現を成立させる比喩の仕組みと動機づけ（基盤）を明らかにするものである。本研究が「身体部位詞表現の階層モデル」と呼ぶモデルを用いた分析を行うことで，複数の比喩とその基盤を体系的に論じることができることを示す。

(1)　腹を抱える，腹が大きい，腹の底を打ち割る，腹を合わせる，腹が出来る
(2)　胸が高鳴る，胸騒ぎ，胸が狭い，胸の霧，胸算用
(3)　頭が痛い，頭が上がらない，頭を砕く，頭の回転が速い，頭が弱い

従来の認知言語学研究は，上記の(1)–(3)のような身体部位詞表現の意味的特徴，意味拡張を支える比喩的認知プロセスの多くを明らかにしてきた。一方，それらを支える動機づけ（身体基盤・文化基盤）に関しては各々の研究が独自に巨視的な分析を与える傾向にあり，説明の体系性に欠けるという問題がある。本稿では，現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の動機づけとして複数の基盤が関与するという考えのもと，一連の表現を比喩的な成り立ちに基づいて分類することで，各基盤が関係する表現を整理した上で，精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を特徴づける中心的な役割を果たす基盤が何であるかを論じた（第3章）。また，意味拡張という観点から通時的調査を行うことで，新たに〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の史的展開を記述するとともに，現代日本語表現に対して行なった動機づけの分析結果に基づき，身体部位詞の歴史的な意味拡張に対する身体基盤と文化基盤の働きを検証した（第4章）。具体的な構成内容は次のとおりである。

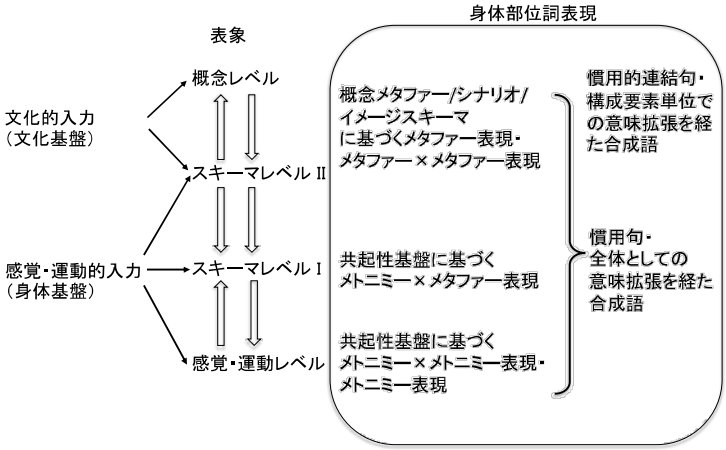
第2章では，本研究の分析で援用する理論的枠組みとして，慣用句（本研究でいう慣用表現）の分解可能性に基づく分類と，認知意味論の諸概念を整理した。はじめに，イディオム・慣用表現の意味に焦点を当てた国内外の先行研究をたどり，分解可能性の観点から本研究での身体部位詞表現の分類方法を定義づけた。Nunberg(1978)などによる分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムの二分と有薗(2009)による慣用句・慣用的連結句の分類は，互いに類似する一方で，一部相違すると思われる点が存在する。この相違は，句全体の慣用的意味を見た際に，その意味要素と構成語それぞれが持つ意味との対応づけの可否を判断基準とするのか，それとも句が慣用的意味を得る際に意味拡張が生じた単位（語かそれとも句か）を判断基準とするのかで生じると考えられる。本稿では，後者の基準をもとに，援用する有薗(2009)の慣用句・慣用的連結句の概念を再解釈し，さらに対象を合成語にまで広げることで，慣用表現の下位区分（慣用句・慣用的連結句／全体としての意味拡張を経た合成語・構成要素単位での意味拡張を経た合成語）を定義づけた。続く第2章の後半では，本研究で援用する分析の枠組みである認知言語学の重要概念として，メタファー，メトニミー，メタフトニミー，イメージスキーマ，プロトタイプシナリオ，身体基盤と文化基盤，文化モデルを順に概観した。

第3章では，現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義を成立させる比喩とその動機づけを分析し，精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解の成立基盤を明らかにした。主なリサーチギャップとして，上で述べた動機づけに対する体系的な説明の欠如を取り上げ，想定される複数の基盤を統合的に扱うモデルが確立されていないことを指摘した。この問題を解決するため，楠見・米田(2007)の「感情言語の階層モデル」を応用した「身体部位詞表現の階層モデル」を新たに導入し，〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の分析を行なった。このモデルは，精神作用に関する意味を持つ身体部位詞慣用表現を，比喩的な成り立ちに基づいて複数の階層に分類することで，その身体部

位と精神作用をつなぐ動機づけを明らかにすることを可能にするものである。まず，(1)–(3)に挙げたような身体部位詞表現は，慣用表現としての分解可能性とその比喩的な成り立ちから，次に示す七種に分類することができる。

	名称	身体部位の描写	精神作用との結びつき	(1)–(3)の例
①	メトニミーによる慣用句・合成語	（比喩なし）	メトニミー的	腹を抱える，胸が高鳴る，頭が痛い
②	メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語	メトニミー的	メトニミー的	頭が上がらない
③	メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語	メタファー的	メトニミー的	胸騒ぎ，頭を砕く
④	メタファーによる慣用句・合成語	（比喩なし）	メタファー的	腹が大きい，胸が狭い
⑤	メタファー×メタファーによる慣用句・合成語	メタファー的	メタファー的	腹の底を打ち割る，胸の霧，頭の回転が速い
⑥	身体部位詞のみが意味拡張した慣用的連結句・合成語			胸算用，腹を合わせる
⑦	身体部位詞とその他の要素が意味拡張した慣用的連結句・合成語			腹が出来る，頭が弱い

慣用句（句全体での意味拡張を経た慣用表現）・全体としての意味拡張を経た合成語は，身体部位の描写における比喩の関与（cf. 伊藤，1999a，1999b；山梨，1988/2007）と，慣用的意味（精神作用）への意味拡張に関わる比喩の二つの基準に基づいて①から⑤に分類される。たとえば，「頭を砕く」という表現では，「砕く」が痛み（cf.「頭が痛い」）をメタファー的に表現し，「砕く」によって喩えられる痛みが共起性（メトニミー）に基づいて〈思考（苦悶）〉を表現している。本研究では，比喩的な成り立ちの異なるこれら七種の慣用表現（合成語を含む）を，下に示す通り「身体部位詞表現の階層モデル」に配置した。



これらの層は，身体基盤に基づく感覚・運動レベル，それらの身体基盤が抽象化・一般化を経たスキーマレベル，さらにそれらが社会・文化的な要因を含めて統合・複雑化する概念レベルに分けられる。スキーマレベルは身体経験の抽象化・一般化の度合いに応じてスキーマレベルIとIIへ分類され，後者にはイメージスキーマが含まれる。本研究では，これらの四層を分析上，感覚・運動レベル(L1)，スキーマレベルI(L2)，スキーマレベルII～概念レベル(L3)へと三分し，上の①から⑦を分類した。精神作用との共起的経験に基づく①②は感覚・運動レベル(L1)へ，それらの身体経験がメタファーを通じて描写された表現③はスキーマレベルI(L2)へ，（構造的な）類似性に基づくメタファーによって精神作用との結びつきを獲得した表現④⑤はスキーマレベルII～概念レベル(L3)へ

配置される。また，慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語（⑥⑦）は，L3の表現として扱われる。

第3章の後半では，この「身体部位詞表現の階層モデル」を用いることで，精神義を持つ〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を分類し，各種表現に関係する身体基盤・文化基盤を論じた上で，精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解が成立基盤の観点から次のように特徴付けられることを結論づけた。

- 精神作用の座としての〈腹〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは，五臓思想（e.g. 長谷川ほか，2012）・丹田思想（e.g. 片渕，2023）・本音と建前文化（Matsuki，1995）といった文化基盤であり，特に丹田思想・本音と建前文化に関しては他部位との差を最も明確に生じさせる文化的要因である。
- 精神作用の座としての〈胸〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは，感情経験に伴う生理的感覚・反応に関する胸部の共起的な経験基盤（有薗，2007，2009）である。
- 精神作用の座としての〈頭〉の理解を特徴付ける動機づけの中心にあるのは，近代西洋医学に基づく知識的な文化基盤（e.g. 長谷川ほか，2012）である。

上の結論は，想定される一つの基盤に注目するのではなく，複数の基盤を包括的に扱った上で全体像を示し，その上で部位を特徴づける中心的な動機づけを明らかにしたものである。このようなプロセスを経たことで，結果的に〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の動機づけとして従来論じられてきたものを含む基盤が裏付けられた。

第4章では，身体部位詞の意味拡張という観点から，〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の展開を歴史的に観察することを通じて，第3章で分析した〈腹〉〈胸〉〈頭〉の文化モデルがそれぞれの部位に関わる身体基盤・文化基盤の影響を受けながら現代までに発展してきたことを明らかにした。まず，リサーチギャップとして，認知言語学における日本語身体部位詞の歴史的調査の欠如，身体基盤・文化基盤の両観点を取り入れた比喩表現研究の事例研究（検証）の不足という二点を指摘した。これらの課題に取り組むため，『日本国語大辞典　第二版』の（子）見出しの初出例として挙げられている出典の成立時代を主な手がかりとして，〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞表現の概ねの成立時期を上代・中古・中世・近世・近代・現代へと分類し，各身体部位詞の全体的な意味拡張の傾向を記述した。その上で，第3章で行なった動機づけの分析を身体部位詞の意味拡張に適用することで，〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の展開に対する身体基盤・文化基盤の影響を論じた。調査・分析概要は次のとおりである。

- 〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現のいずれに関しても，情緒的精神（感情）に関する意味の発生が先行する傾向にある。それが顕著なのが，感情経験に伴う身体経験が特に豊富な〈胸〉である。
- 精神のその他の側面に関わる表現が際立って現れるのは，〈腹〉〈胸〉〈頭〉ともに近世以降である。〈腹〉〈胸〉は近世に一通り現代に通じる精神作用との対応が出揃い，〈頭〉は一歩遅れて近代以降に精神作用との対応が定着する。
- 比喩の類型のうち，感覚・運動レベル(L1)に属する比喩に加え，スキーマレベルI(L2)に属する比喩は早期に出現する傾向が見られる。これらは身体経験との共起性に基づいて成立する比喩であり，身体経験が通時的に身体部位詞の比喩義の発生を動機づけるという理論的な仮説を支持するものである。
- 〈腹〉〈胸〉表現と〈頭〉表現の精神義の拡大の隔たりは，日本における心身観の転換（五臓思想から西洋医学に基づく知識への転換）と概ね対応する。このことは，文化基盤はそれが普及した特定の時代において，身体部位詞の比喩義の発生を促すという理論的仮説を支持する。

第5章では，第3章・第4章の調査結果・分析をもとに本研究の結論をまとめ，今後の研究方針を示した。身体部位詞を含め，それ一つで様々な意味に関する比喩表現を構成する語（語群）を対象に比喩義の動機づけを論じるにあたっては，まずは各々の表現の比喩の仕組みに着目し，分類・分析を施した上で，適切なレベルで動機づけの説明を与えるべきである。このような表現レベルでの微視的視点に加え，それらの表現の共通項である構成語（身体部位詞）に対する巨視的な分析を施すことで，その身体部位詞の背後にある身体の理解（文化モデル）を把握することができると考えられる。また，身体部位詞の比喩義の意味変化に関する歴史的研究は，少なくとも日本語においてはほとんど未着手の研究テーマである。比喩の成立基盤に関する理論は，従来の対照言語学的な手法によって検証されると同時に，新たに意味変化という観点からの裏づけを得ることで今後の精緻化を図ることができると考えられる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　後藤　秀貴　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	大森文子
	副 査	教授	田村幸誠
	副 査	准教授	小薬哲哉
	副 査	名誉教授	渡辺秀樹

論文審査の結果の要旨

後藤秀貴氏の博士学位論文『日本語身体部位詞の比喩義に関する認知言語学的研究―精神作用の座としての腹・胸・頭の理解の共時的・通時的分析―』は、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する語を構成要素に含み、精神作用に関する意味（精神義）を持つ日本語表現（たとえば「腹を抱える」「胸が高鳴る」「頭が上がらない」など）を認知言語学の枠組みに基づいて分析し、それらの表現を成立させる比喩の仕組みと動機づけ（基盤）を明らかにすることを目的としている。従来の認知言語学研究では、身体部位詞表現の意味拡張を支える動機づけに関して各々の研究が独自の分析を与える傾向にあり、説明の体系性に欠けるという問題がある。本論文では、現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を比喩的な成り立ちに基づいて分類することで、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解に中心的な役割を果たす基盤の解明を試みた。また、通時的調査を行うことで、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の史的展開を記述するとともに、現代日本語表現に対して行なった動機づけの分析結果に基づき、身体部位詞の歴史的な意味拡張に対する身体基盤と文化基盤の働きを検証した。本論文は5章より構成されている。各章の概要を以下に記す。

第1章では、研究の背景と目的、〈腹〉〈胸〉〈頭〉の定義および本論文の構成と概要を述べた。

第2章では、本研究で援用する理論的枠組みとして、関連する先行研究を整理した。前半では、イディオムと慣用表現の意味に焦点を当てた国内外の先行研究をたどり、分解可能性の観点から本研究での身体部位詞表現の分類方法を定義づけた。後半では、認知言語学の重要概念として、メタファー、メトニミー、メタフトニミー、イメージスキーマ、プロトタイプシナリオ、身体基盤と文化基盤、文化モデルを順に概観した。

第3章では、現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義とその動機づけを分析し、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解の成立基盤を明らかにした。まず、先行研究における動機づけに対する体系的な説明の欠如を取り上げ、想定される複数の基盤を統合的に扱うモデルが確立されていないことを指摘した。現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を構成する比喩は，それぞれどのような身体基盤・文化基盤によって成立しているか、また、身体基盤・文化基盤のうち，現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を最も特徴づける比喩の基盤となるものは何かという研究課題を設定し、楠見・米田(2007)の「感情言語の階層モデル」を応用した「身体部位詞表現の階層モデル」を新たに導入した。このモデルは、精神作用に関する意味を持つ身体部位詞慣用表現を、比喩的な成り立ちに基づいて複数の階層に分類することで、その身体部位と精神作用をつなぐ動機づけの解明を可能にするものである。まず、身体部位詞表現を、慣用表現としての分解可能性とその比喩的な成り立ち(身体部位の描写における比喩および精神作用への意味拡張に関わる比喩の二つの基準)から、①メトニミーによる慣用句・合成語、②メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語、③メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語、④メタファーによる慣用句・合成語、⑤メタファー×メタファーによる慣用句・合成語、⑥身体部位詞のみが意味拡張した慣用的連結句・合成語、⑦身体部位詞とその他の要素が意味拡張した慣用的連結句・合成語の7種に分類し、これら7種の慣用表現を「身体部位詞表現の階層モデル」に配置した。このモデルにおいて、表象は、身体基盤に基づく感覚・運動レベル、それらの身体基盤が抽象化・一般化を経たスキーマレベル、さらにそれらが社会・文化的な要因を含めて統合・複雑化する概念レベルに分けられる。スキーマレベルは身体経験の抽象化・一般化の度合いに応じてスキーマレベルIとIIへ分類され、後者にはイメージスキーマが含まれる。これらの4層を、感覚・運動レベル(L1)、スキーマレベル(L2)、スキーマレベルII～概念レベル(L3)へと三分し、上の①から⑦をこの3つのレベルに分類した。このモデルを用いて精神義を持つ〈腹〉〈胸〉〈頭〉

表現を分類し、各種表現に関係する身体基盤・文化基盤を論じた。その結果、以下の結論を得た。第一に、精神作用の座としての〈腹〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは五臓思想・丹田思想・本音と建前文化といった文化基盤である。第二に、精神作用の座としての〈胸〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは感情経験に伴う生理的感覚・反応に関する胸部の共起的な経験基盤である。第三に、精神作用の座としての〈頭〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは近代西洋医学に基づく知識的な文化基盤である。

第4章では、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の意味拡張の歴史的観察を通じて、第3章で分析した〈腹〉〈胸〉〈頭〉の文化モデルが各部位に関わる身体基盤・文化基盤の影響を受けながら現代まで発展してきたことを明らかにした。まず、認知言語学における日本語身体部位詞の歴史的調査の欠如、身体基盤・文化基盤の両観点を取り入れた比喩表現の事例研究（検証）の不足を指摘した。〈腹〉〈胸〉〈頭〉と結びつく精神作用は歴史的にどのように拡がっていったか、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を支える比喩の展開にどのような特徴が見られ、それらの表現の精神義の展開に身体基盤・文化基盤はどのように影響したかという研究課題を設定し、『日本国語大辞典 第二版』の（子）見出しの初出例の出典の成立時代を主な手がかりとして、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞表現の概ねの成立時期を上代・中古・中世・近世・近代・現代へと分類し、各身体部位詞の意味拡張の全体的な傾向を記述した。その上で、第3章での動機づけの分析を身体部位詞の意味拡張に適用して考察し、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現のいずれに関しても情緒的精神（感情）に関する意味の発生が先行する傾向にあり、それが顕著なのが、感情に伴う身体経験が特に豊富な〈胸〉であること、感情以外の精神作用に関わる表現が際立って現れるのは〈腹〉〈胸〉〈頭〉ともに近世以降であること、〈腹〉〈胸〉は近世に一通り現代に通じる精神作用との対応が出揃い、〈頭〉は一歩遅れて近代以降に精神作用との対応が定着すること、身体経験との共起性に基づく感覚・運動レベル(L1)およびスキーマレベルI(L2)に属する比喩は早期に出現する傾向が見られ、身体経験が通時的に身体部位詞の比喩義の発生を動機づけるという理論的な仮説を支持するものであること、〈腹〉〈胸〉表現と〈頭〉表現の精神義の拡大の隔たりは、日本における心身観の転換（五臓思想から西洋医学に基づく知識への転換）と概ね対応し、このことは、文化基盤はそれが普及した特定の時代において身体部位詞の比喩義の発生を促すという理論的仮説を支持することなどを論じた。

第5章では、本研究の結論を述べ、今後の研究方針を示した。

以上のように、後藤氏は、上代から現代に至るまでの身体部位詞比喩表現を広く分析対象とし、361ページにわたる論文にまとめている。これらの表現を分類する独自のモデルを提唱し、比喩の仕組みと動機づけを共時的に分析して複数の比喩の基盤を体系的に論じるとともに、身体部位詞の比喩義の意味変化に関する歴史的研究という、少なくとも日本語においてはほとんど未着手の研究テーマに取り組み、共時的分析の結果を通時的分析にも適用して統括的に説明し、各身体部位詞の意味基盤について明確な結論を提示した本研究の新規性、独自性、立論の確かさは高く評価することができる。言語学の文献はもとより、それ以外の文化的な文献も網羅的に調べ、多角的な見地から論じているところも高い評価に値する。今後の後続研究者が最初に参照すべき羅針盤的な研究と位置づけられよう。図表も非常に見やすく明瞭で、後続研究者の手本となる。一方で、審査においては次のような指摘があった。文化基盤と精神基盤という概念の関係についてはさらに詳細に検討する必要がある。歴史的展開において、身体基盤が先行し文化基盤が後続するとは必ずしも言えないのではないか。本論文で論じられた近代西洋医学の知見に基づく頭の文化基盤から多様な比喩表現が成立したという現象がまさにこのことを実証しており、腹と胸の文化基盤に影響を与えた五臓思想などについても同様のことは言えないか。身体部位詞を含む比喩表現を「身体部位詞表現の階層モデル」内のどのレベルに分類するかという基準は人によって異なり、複数の解釈が可能な場合があるので、より明確な基準を設定すべきではないか。用例の原典参照についてはさらなる厳密さが求められる。先行研究渉猟において、史的言語学の専門知識を持たない認知言語学者の論述には注意を払う必要がある。用例の歴史的区分については、2つの時代にまたがる場合がある。考察対象表現を辞書資料に限定すると、表現の見落としが出てくるので、今後は文学作品など観察対象を広げることも検討すべきであろう。また、今回の研究は、中国語や英語と日本語の対照研究という後藤氏が当初目指していた研究の方向性を軌道修正したものとなったが、今後は対照研究も視野に入れ、そのために着目すべき観点も具体的に検討してはどうか。表現の廃用や意味変化の視点を研究に採り入れ、現代では意味的説明がつかない古い表現の成立理由についても考察し、その際、身体部位詞と述語のコロケーションについて詳細に調べると良いのではないか。このように、今後の研究課題や改善の余地が示された。しかしながら、本論文は身体部位詞比喩表現を共時的かつ通時的に通観し、統一的な観点から比喩の仕組みと動機づけを探究するという規模の大きい研究テーマに果敢に取り組み、その研究成果は高い評価に値するものであり、認知言語学における比喩研究に少なからぬ貢献をしていることは間違いなく、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。